

第5室

(1) 15:30 ~ 16:00 (2) 16:10 ~ 16:40
(3) 16:50 ~ 17:20 (4) 17:30 ~ 18:00

第5室 (1)

SNS X

教師の自律性支援が行為主体的エンゲージメントに及ぼす影響

—心理的欲求を媒介として—

染谷 藤重 (京都教育大学)

現代教育において児童・生徒の授業へのエンゲージメントの向上が重要とみなされている。自己決定理論では、教師の動機づけスタイルによって、学習者の心理的欲求が変化し、エンゲージメントに影響を及ぼすという論が展開されている。本研究では、教師の動機づけスタイルの一つである「自律性支援」指導、生徒の「心理的欲求」の充足、及びエンゲージメントの一つとして「行為主体的エンゲージメント」を取り上げ、それらの関連性について論じる。いくつかの先行研究 (e.g. Reeve & Shin, 2020) から、教師の「自律性支援」指導が学習者の「心理的欲求」を媒介として「行為主体的エンゲージメント」を予測するということが明らかとなっている。現状、日本の英語学習における上記の関連性を検証した研究は見られず、今後の研究の発展が望まれる。本発表では、上記の関連性を明らかにするために、日本の大学1年生303名に対して英語学習動機に関する5件法によるアンケート調査を行った。調査は2022年4月初めに行われた。その結果を多変量解析及びSEMを用いて分析することで、「自律性支援」指導→「心理的欲求充足」→「行為主体的エンゲージメント」という媒介モデルの存在を確認することができた。上記の媒介モデルの存在が明らかになったことにより、教師が自律性支援の視点を理解し、生徒の心理的欲求を充足させていくことで、より意欲的に学習活動に取り組むことを助けるようなエンゲージメントであり、学習者の学業成績などを予測するとされる行為主体的エンゲージメントを高めることができると考えられる。これらのプロセスを学習者がたどっていくことによって、英語力の向上に寄与していくことが考えられる。

第5室 (2)

大学生英語学習者の授業中における動機づけの変動報告

宮本 康平 (愛知学院大学大学院生)

動機づけ (Motivation) は第二言語習得の成否において重要な要因として位置づけられており、個人差要因の研究の中でも最も盛んに取り上げられてきた。第二言語習得における動機づけ研究において、近年、動機づけは常に安定しているものではなく、時間の流れとともに変化しているものと考えられることが多くなってきている。その影響で、多くの研究が、個人間の動機づけを比較する従来の横断研究から、個人内での一定期間内の動機づけの変化を観察する縦断研究に変

わってきている。そして、その定められた期間は1年間や1か月といった長期間であることが多い。

そこで、本研究では、動機づけは長期間においてではなく、毎分毎秒といった短期間でも変動しているのではないかと考え調査してみた。1コマ（90分）の授業という短期間の中で英語学習者の動機づけはどのように変動するのか、また変動を起こしている要因は何かを調べることにした。今回の調査方法は、大学生の多読授業を対象にし、1コマの間の動機づけの変化を2週に亘り測定・観察した。測定道具としてモートメーター（motometer）、授業評価アンケート（7件法）、授業録音機器を用いた。モートメーターとは、Waning et al. (2014) において紹介された器具で0~100の目盛りがあり、決められた時間に鳴る合図に合わせてその時点での動機づけの高さを自己評価で記入するものである。調査結果から動機づけの変動に特徴があったデータを4人分提示し、動機づけの変動を分析し考察した。その結果、個人内での動機づけ変動は、タスクの難易度、タスクへの関心、体調の変化など複雑な要因の相互作用によることが明らかになった。今後は、測定道具に、動機づけの一般的なベースラインでの状態を加えることによって、動機づけの特徴と変動の関係をより一層明らかにしていく必要がある。

第5室 (3)

SNS X

自律的学習の動機付けとして学習者が抱く『可能自己 (possible selves)』

土屋 加恵 (南山大学大学院生)

第二言語習得研究において「学習者の自律性 (Learner autonomy)」とは、自分で自分の学びをセルフ・プロデュースできる能力と定義される。ヨーロッパが起源のこの概念は、学習者の文化的背景や、学習環境における社会的コンテキストが個人の自律性形成に大きく影響するとして、日本をはじめアジアの国々でも研究が進められている。このような地域では多くの場合、日常言語として英語を使用しないことから、英語習得の成功において学習者の主体的な学習態度がより重要とされている。英語学習の方法や教材がさまざま開発される現代、そうした学習の実現には、学習者が個人のニーズに合わせて学びを選択できるようになることが重要であると考えられる。それは、学習の目的や目標の達成に近づくだけでなく自ら学ぶ意味を理解した上で取り組む、より内発的で持続的な学習につながると考えるからである。

本発表では、修士課程2年目の現在取り組んでいる研究の進捗を報告する。本研究テーマの背景について「学習者オートノミー」と「動機付け理論」の先行研究に従って説明し、データの収集方法、調査計画を述べた上で、予想される成果と本調査の意義について論じる。

本研究の目的は、自律的な学習を促す動機付けとして学習者がなりたい「自己像」に着目し、一人ひとり異なる「理想自己」のイメージが、どのような過程を経て形成されるのか、また個人の学習経験において、その自己概念がどのような動機付けの役割を果たすのか分析することである。研究対象者は、私立大学の英語を専攻する1年生である。2022年4月に、2つの英語クラス(計50名の学生)に対して英語学習の背景に関するアンケートを行い、記述式で集められた回答の内容をもとに一部の学生を選び出した。今後の計画では、個人インタビューなどを通して、個別の学習経験に焦点を当て、「L2動機付け自己システム論(The L2 Motivational Self System)」の「自

己可能」の概念に基づいて考察を行っていく。

第5室 (4)

Factors affecting WTC during a speaking task

Katsuyuki Konno (Ryukoku University) • Tsutomu Koga (Ryukoku University)
Rintaro Sato (Nara University of Education)

Willingness to communicate (WTC) can be one of the most important factors Japanese learners have to develop to have successful communication with others. From the global point of view, quantitative studies have found WTC is affected by motivational and attitudinal variables. However, WTC is now considered a dynamic variable that fluctuates from moment to moment and is influenced by a variety of things and emotions occurring in specific communication settings. Therefore, we focused on a total of six possible variables (i.e., anxiety, confidence, enjoyment, interest, value, and duty) intertwining with WTC in a complex manner. In this study, 50 first- and second-year college students participated, and they were randomly assigned to pairs to have a conversation in English for two minutes. They were instructed to keep talking about what they did during winter vacation. Right before and after the task, they completed questionnaires measuring these seven variables. In the post questionnaire, they were asked to explain about their ratings on each questionnaire item and the reasons why they were willing and unwilling to talk during the task. To see whether learners' WTC changed from the beginning to the end of the task, cluster analysis was performed. The result showed that these learners were classified into the following four different groups: two groups showing increases and the other two showing decreases. The results of the analysis of the open-ended questionnaire suggested that learners in the first two groups became more willing to talk because they enjoyed the task, cared about their partner, and felt a sense of duty to carry out the task. On the other hand, learners in the latter two groups attributed their unwillingness to anxiety and the lack of linguistic resources. Next, correlation analysis was performed to investigate the relationships among the variables. As a result, the correlation between WTC and enjoyment was the strongest, which, in turn, supported the results of the open-ended questionnaire. We concluded that WTC is coconstructed by those who can enjoy a conversation.